

群 教 七	F01 - 01
	平 16.218 集

# 教師の省察と協働を支援する 週案簿活用モデルの作成

## 授業リフレクションの導入を通して

長期研修員 岸 卓  
長期研修員 松島 隆

### 研究の概要

週案簿の項目と教師の意識について質問紙による調査を実施した。調査をもとに、週案簿に省察的な項目を設定するとともに、授業リフレクションを位置づけた週案簿の活用モデルを構築した。県内の小・中学校で試行した結果、協働的な授業研究が形成され、授業後に教師が行う振り返りが授業改善への意識を高めるとともに、児童・生徒の学習活動に着目し、自己の授業観を自覚したり深めたりすることが認められた。

【キーワード：教育課程 授業研究 週案 リフレクション 振り返り】

## 1 目的

### 1 主題設定の理由

#### 日常的な教育課程評価の必要性

教育課程の評価にかかわる具体的な取組として、学校評価が挙げられる。学校評価は、教育課程も含む、学校の諸活動全般について行われる大規模な評価といってよい。平成 16 年度より、本県で実施されている学校評価システムにおいては、1 年間に 2 回程度の評価を行うとされている。一方で、授業改善や日々の教育活動の改善においては、日常的で短期的な評価が不可欠である。学校評価のように、中・長期的な評価も、日常的な評価が集積され、相互に関連づけられて、より精度の高い評価となるわけである。しかしながら、これまで、短期的な教育課程の評価は、学校全体で取り組んでいる場合もあるが多くは教師個人の創意工夫で実施されたものであり、明確な方法論の基に実践されたり、位置づけられたりした取組は見あたらない。

#### 日常の「カリキュラム管理簿」としての週案簿

週案簿は、教師にとって、年間指導計画と日案または本時の指導案とを結びつける位置にある。年間指導計画で予定された内容を児童・生徒の実態や他の教科との関連、各種行事との関係などを考慮し、実際の時間割にそって、ねらいや内容を計画し、配当するものである。適切な配当がなされなければ、予定時間の超過や余剰が生じたり、単元や題材のねらい、教科のねらいを達成できないという状況が生じる。このように、週案簿は年間指導計画と日々の授業を結びつける機能をもった「カリキュラム管理簿」としての性格を有する。

#### 本県教育課題と週案簿

授業改善においては、授業の計画性が重視されている。本県教育委員会からだされた「教育課程の評価、編成及び適正な実施・管理について（通知）」（平成 16 年 2 月 23 日）及び「学校教育の指針」（平成 16 年 3 月）、「『確かな学力』向上のための 36 の方策」等には、週案簿を活用しての計画的な授業の実施が盛り込まれている。その背景には、学力向上を図る手段は授業改善にあり、見通しをもった授業計画と実施・評価が一体となって改善に結びつくとの考えがあるからである。週案簿の内容については、県教育委員会より出された「『学力向上推進委員会』の協議に基づくアピール」（平成 16 年 3 月）によると、「教える内容をしっかり確認して」授業

に臨むために、週案において、単元名だけでなく、学習のねらいを明確にすることが挙げられている。また、授業の計画段階で、子どもたちが達成すべきイメージをおさえておくことが必要であると書かれている。さらに、「教育課程の評価、編成及び適正な実施・管理について（通知）」や「『確かな学力』の向上のための36の方策」においては、本時のねらいを明確にし授業を行うことや、授業後の課題を明確にし改善を心がけることが濃密な授業を実施する上で必要な内容ととらえられている。すなわち、授業の質を高めるためには、週案を立案するなかで、本時のねらいを明確にしたり、期待する子どもの変容をおさえて授業を設計し、それらを計画的に組織したりすることが必要であることを意味している。

#### 教師の振り返り活動の必要性

秋田（1999）は、教師の熟達の要因として、Schön(1987)やEricsson,Krampe & Tesch-Romer(1993)を引用し、ある一つの道を極めていくには自分の行為を省察し、明確な目的意識に基づきよく考えられた実践を行うことが必要であることを指摘している。さらに「単に繰り返し経験し月日を過ごしていくことで熟達するのではなく、そこには自覚的な思考が必要である」とし、このような思考が連環的に繰り返される中で教師は熟達していくとの見解を示している<sup>(1)</sup>。また、木原（1998）は、授業研究の領域における省察のとらえ方として「教師が教育実践を再構築していく過程」であるととらえ、「自己の教育実践を何らかの手段によって対象化し批判的に検討すること、そうした過去や現在の営みの分析を出発点として、新しい教育実践を切り拓くこと」から省察が成り立つととらえている。また、佐古ら(1999)は、わが国における、省察を基盤とした教師教育研究、授業研究が蓄積されつつあるとし、前述の秋田や木原の見解を挙げている<sup>(2)</sup>。そこで、本研究においては、省察が教師の力量形成を促すものであり、授業改善の手だてとして有効であるととらえ、週案簿に省察的な項目を取り入れることとした。

#### 週案簿の利用についての教師の実態より

本県教育委員会より出された「『学力向上推進委員会』の協議に基づくアピール」（平成16年3月）によると、授業を充実させるために必要な内容として位置づけられ、週案簿に記入することが望ましいとされている内容として、本時のねらい、子どもの変容にかかわること、評価にかかわることが挙げられている。これらの項目について週案簿への記入状況を調査したところ、記入している教師の割合は約40%以下にとどまった。その反面、教科名や題材・単元名など見出し的な項目や、時数集計にかかわる項目は多くの教師が記入している結果となった。このようなことから、量的管理に関する項目は多くの教師が記入しているが、質的管理に関する項目はあまり記入されていない傾向があると推測した。よって、日常的な「カリキュラム管理簿」として使用されている週案簿に質的管理にかかわる項目を盛り込み、それらの活用状況を高めることは、授業の質を高め、教育課程の質的管理をする上で重要なことと考えた。

以上のような理由から、本研究は、週案簿の形式やその活用を工夫し、教育課程の質的管理に資する週案簿の活用の在り方を明らかにすることを目的とした。具体的には、週案簿における質的管理に関する項目への記入を通して、教師の振り返り活動を促進し、教師間の授業公開による相互啓発を促す活用モデルを作成し、教師の省察と教師間の協働を支援する仕組みを構築した。

## 2 研究のねらい

- ・ 週案簿の活用についての実態調査及び、教師の意識調査により、授業の質を高めるために週案簿が具備すべき条件や形式について明らかにする。
- ・ 授業の質を高めるための省察と協働を促す週案簿の活用の在り方について明らかにする。

## 3 研究の見通し

週案簿の活用を通して、次のような教師の取組を行えば、授業の課題を把握し、次時の改善を促すとともに、教師自らの指導観や授業観を高めることができるだろう。

- 1 週案簿に、授業実施前に「本時のねらい」、「手立て」を記入し、授業実施後に「振り返り」を記入することにより、教師が指導上の課題を把握し、次時につながる手立てを設定するであろう。
- 2 週案簿の「振り返り」欄に児童・生徒の学びの事実に基づく記述をすることにより、教師が児童・生徒理解を深め、自己の指導観や授業観を高めていくだろう。
- 3 週案簿の公開と授業の相互参観をもとに、小集団のリフレクションを行うことにより、児童・生徒の変容を多面的にとらえ、教師自らの指導観や授業観を高めることができるだろう。

#### 4 研究の手順

本研究においては、群馬県内の小学校、中学校における週案簿の活用実態や教師が週案簿について抱いている意識を把握するため、質問紙による調査を実施した。

実態調査から得られた結果をもとに、週案簿の形式と活用の在り方を試案としてまとめ、「週案簿活用モデル」とした。活用モデルの作成にあたり、省察概念を導入し、毎時の授業の振り返りと小集団によるリフレクションを取り入れた。

作成した活用モデルを県内の小・中学校で試行し、改善点や修正点について検討した。小学校においては、主に、週案簿活用モデルにおける個人の流れを中心に検討し、中学校においては、対話リフレクションや集団リフレクションを含めた、協働的な取組を中心に検討した。

#### 5 協働についての基本的な考え方

協働とは、2人以上の人間が協力し、共通の目的をもって働くことである。住岡(2004)は、学校における協働には、2つの意味が内包されると指摘している。一つは、明確な目標による学校組織の統合と教職員間での合意に基づく協働、もう一つは、教職員間の信頼関係と参加に基づく協働である<sup>(3)</sup>。すなわち、協働においては、目標、合意、組織としての統合的な活動、信頼関係に基づく積極的な参加が中心概念となる。このことにより、本研究における協働とは、教職員が学校の教育目標を明確に意識した上で積極的に経営に参加し、互いの信頼関係のもと、啓発し合い高め合いながら、組織体として統合された教育力を発揮することととらえた。

## II 週案簿に関する実態調査

### 1 はじめに

週案簿の活用の仕方は、各学校ごとに様々である。これまで、週案簿の活用実態や週案簿に対する教師個人の意識について調べた調査は見あたらない。そこで、県内小中学校の新任教務主任及び特別研修員を対象に、現状の週案簿の形式にかかわる調査と週案簿についての意識調査を実施した。これらの実態調査をもとに、週案簿に必要な項目の選定や授業の質を高める週案簿の在り方について明らかにすることを目的とした。

### 2 方法

#### (1) 調査方法

週案簿の活用状況、現状の週案簿に存在する項目、週案簿に記入している内容、教師の週案

簿に関する意識について質問項目を作成し、調査紙とした。

(2) 調査対象

平成 16 年度群馬県総合教育センター特別研修員 110 名と平成 16 年度新任教務主任研修講座該当者 77 名の合計 187 名を対象に調査を実施した。結果の考察については、小学校、中学校の教師に限定して行った。

(3) 実施日

新任教務主任については、平成 16 年 6 月 2 日(水)～7 月 5 日(月)に実施し、特別研修員については平成 16 年 6 月 4 日(金)～6 月 11 日(金)に実施した。

3 結果及び考察

結果の考察にあたり、校種を小学校、中学校に限定したところ、調査対象者数は、小学校教師 99 名、中学校教師 65 名、合計 164 名となった。

(1) 週案簿の利用状況

表 1 は「あなたは、週案を記入するもの(週案簿)を持っていますか」という質問項目に対する、小中学校の調査対象者(164 人)の回答結果である。この表が示すように、小学校、中学校をあわせて 96.3%という値を示し、ほとんどの小・中学校の教師が週案簿をもっていると推察された。

表 1 週案簿の利用状況

選択肢	小学校		中学校		総計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
もっている	96	97.0%	62	95.4%	158	96.3%
もっていない	3	3.0%	3	4.6%	6	3.7%
合計	99	100%	65	100%	164	100%

(2) 週案簿に記入している内容

「週案簿を使用している」と回答した調査対象者について、調査紙に挙げられた項目や欄が「ある」と回答したうち、それぞれの項目について「記入している」と回答した人数を図 1 に示した。

「記入している」と回答した程度をグラフの中で相対的に判断し、上位、中位、下位の 3 群に分けて考察した。また、週案簿の各項目を質的管理と量的管理という 2 つの視点でとらえ、分類した結果を表 2 に示した。

表 2 が示すように、質的管理に関する項目は、学習内容を除き下位群に集中した。また、量的管理に関する項目では、時数や教科名は上位群、本時の位置付けは下位群に属し、それ以外の項目については中位群に属した。

これらのことから、週案簿において、教科名や単元・題材名などの見出し的な項目、時数などの量的管理に関する項目、さらに学習内容などについては多くの教師が記入しているが、授業後の課題や子どもの変容の記録、手だてや評価に関する内容は記入している教師が少ないと推察した。

週案簿を持っていると回答した被験者について、下の各項目が「ある」と回答した場合の記入状況(度数：人)

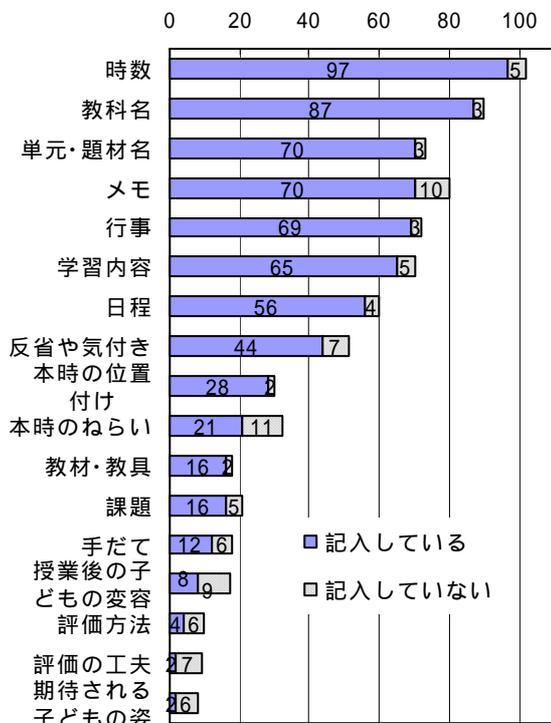


図 1 週案簿への記入状況(1)

なお、図1において、「記入していない」と回答した度数は、どの項目についても11人以下であり、「記入していない」という回答については顕著な差は確認できなかった。

調査紙の各項目について「ない」と回答したうち、「記入している」または「記入していない」と回答した人数を図2に示す。

「記入している」、「記入していない」との差が大きな項目について着目すると単元名・題材名、行事、学習内容、教科名については、「記入している」人数が、「記入していない」人数を上回った。これらの項目については、記入のための欄がなくても、記入している内容であり、必要感の高い項目と判断した。

本時の位置付け、教材・教具、本時のねらい、課題、反省や気づき、授業後の子どもの変容、手だて、期待される子どもの姿、評価方法、評価の工夫については、項目がなければ記入されない内容と推察した。

このことより、質的管理に関する内容は週案簿に項目がなければ記入に結びつかないことが示唆された。

### (3) 週案簿に対する意識調査

週案簿に対する意識調査の結果を図3に示した。検討にあたり、「4:まったくその通りである」、「3:まあまあそう思う」と回答した割合を合計し、考察した。

「5.週案簿は次の授業を考えるのに必要である」、「6.週案簿は必要だと思う」について「4」、「3」と回答した割合は90%を越えており、週案簿は必要であるという認識が高いことが推察された。その用途については、「1.週案簿の時数集計は必要である」が上位に位置していることから時数集計などの量的管理を行うためや、「13.週案簿には、結果のみでなく授業の計画を記入すべきである」についての回答が上位に位置していることより、結果の記入ではなく週の計画を立てるために用いるという認識が強いことが示唆された。「4.週案簿に本時の重点などを記入するとよいと思う」、「12.週案簿は本時の内容やねらいの確認に必要である」については、「4」と「3」を合わ

表2 各項目の記入状況

	上位群	中位群	下位群
質的管理		学習内容	反省・気づき 本時のねらい 教示・教具 課題 手だて 子どもの変容 評価方法 評価の工夫 期待される子どもの姿
量的管理	時数 教科名	単元・題材名 メモ 行事 日程	本時の位置付け

注) 上位群：回答数 80  
中位群：80 > 回答数 50  
下位群：回答数 < 50

週案簿に下の各項目が「ない」と回答した場合の記入状況(度数：人)

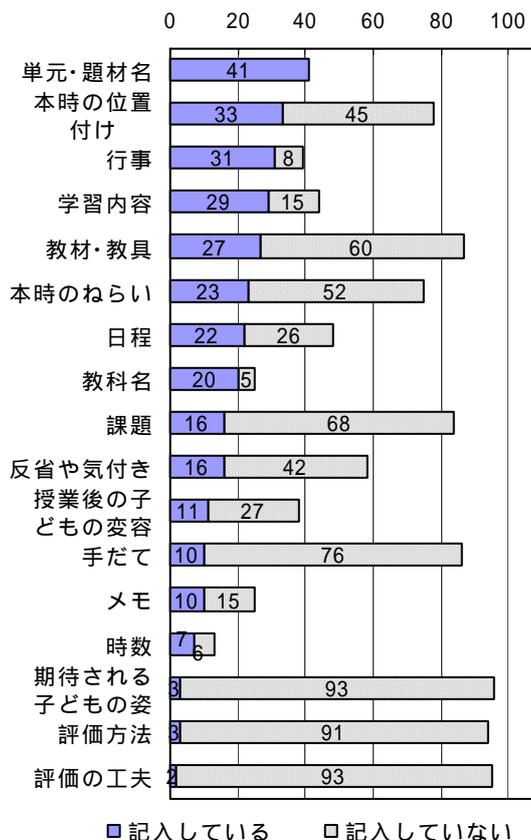


図2 週案簿への記入状況(2)

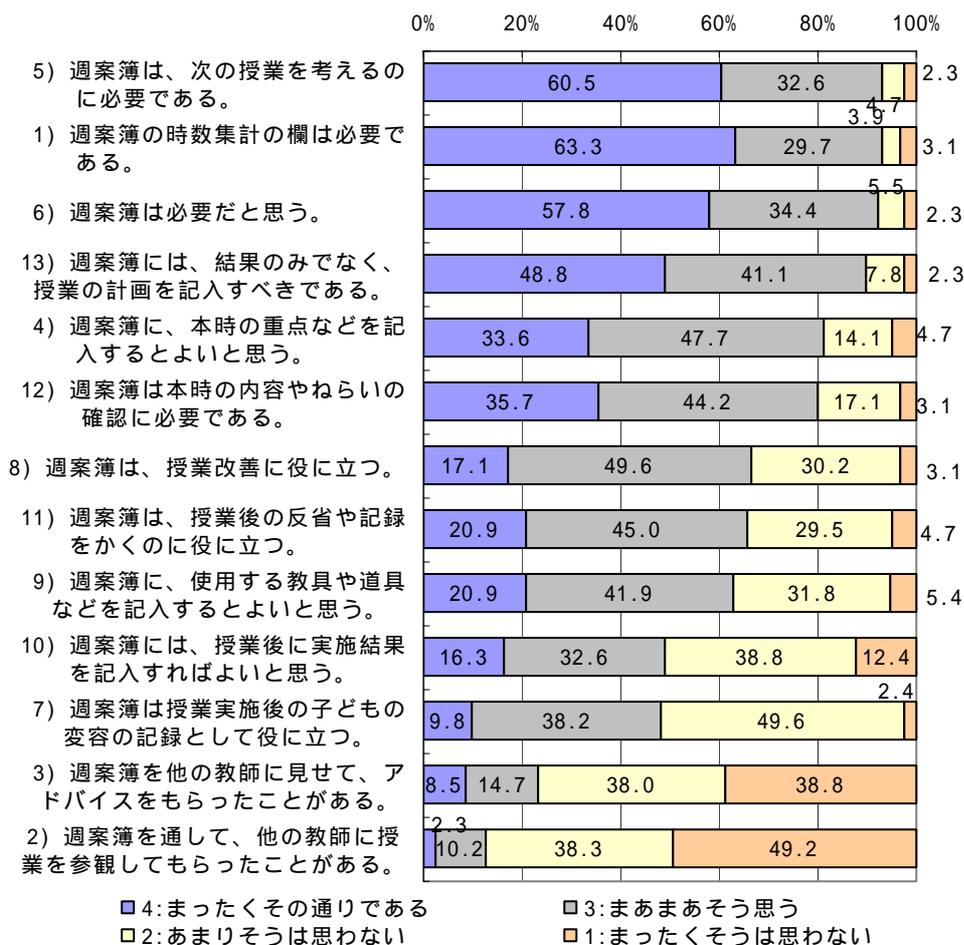


図3 週案簿についての教師の意識

せて約 80%であり、本時のねらいや内容の確認に週案簿は必要であると多くの教師が感じていると推測した。また、「8. 週案簿は授業改善に役立つ」についての回答が中位に位置していることから、週案簿が授業改善に役立つという認識をもっている教師は少なくないと推測した。

子どもの変容にかかわる項目については、「7. 週案簿は授業実施後の子どもの変容の記録として役に立つ」において、「4」と「3」を合わせても、約 50%を下回り、子どもの変容にかかわることは週案簿には記入できないという意識があることや、記入するような仕組みになっていないことが示唆された。週案簿を公開し、教師相互の授業の公開や参観が実施されているかどうかについては、「2. 週案簿を通して、他の教師に授業を参観してもらったことがある」、「3. 週案簿を他の教師に見せて、アドバイスをもらったことがある」の項目がいずれも下位に位置し、公開・参観をするための週案簿がほとんどないことや、そのような視点で週案簿をとらえていないことが推察された。

#### 4 まとめ

週案簿の活用実態や週案簿について教師が抱いている意識について検討するために、平成 16 年度特別研修員及び新任教務主任を対象に実態調査を行い、回答結果を検討したところ、小学校・中学校の範囲で、次の結論を得た。

1) 小学校・中学校において、多くの教師が週案簿を利用していることが推察された。

- 2) 全体的に、質的管理に関する項目は記入状況が低く、量的管理に関する項目のうち、教科名や単元名は高い割合で記入され、他の項目は記入状況が中程度という傾向であった。
- 3) 質的内容に関する項目はその項目がなければ記入に結びつかないことが示唆された。このことにより、週案簿に質的管理に関する項目を設けるとともに、質的管理に関する項目への記入を促し、授業改善につなげる必要があると考えた。
- 4) 多くの教師が週案簿は必要であると感じていることが認められた。必要と感じる理由として、本時のねらいや学習内容の確認、さらには授業改善に役立つとの認識があることが認められた。
- 5) 子どもの変容にかかわることは週案簿には記入しない傾向があることや、記入するような仕組みになっていないことが示唆された。
- 6) 公開・参観をするための週案簿がほとんどないことが認められた。その理由として、週案簿を公開することや週案簿を通して参観するという視点で週案簿をとらえたことがこれまでなかったためと推測した。

### III 週案簿活用モデルの作成と検討

#### 1 はじめに

週案簿に関する実態調査をもとに、授業の質を高める週案簿の形式と活用のモデルを作成した。作成したモデルを小学校、中学校における試行を通して検討することにより、授業の質を高めるための省察と協働を促す週案簿の活用の在り方について明らかにすることを目的とした。

#### 2 週案簿活用モデルの概要

##### (1) 週案簿活用モデルの基本構想

日常的に行う教師の省察と教師相互の協働を支援する立場から、授業構想とカリキュラム編成の流れを図4に示すようにとらえた。また、実態調査の結果を踏まえ、質的管理に関する項目を週案簿に盛り込むとともに、図4に示した流れの中に週案簿を位置づけた。すなわち、週案簿を記録のための道具ととらえるのではなく、個人や集団における省察と、教師相互の授業参観や授業研究会など、協働的な取組を含めた流れの中に位置づけ、一連の流れを結びつける道具としてとらえた。このような視点でとらえた週案簿の形態と活用のモデルを「週案簿活用モデル」と呼び、図5に示した。

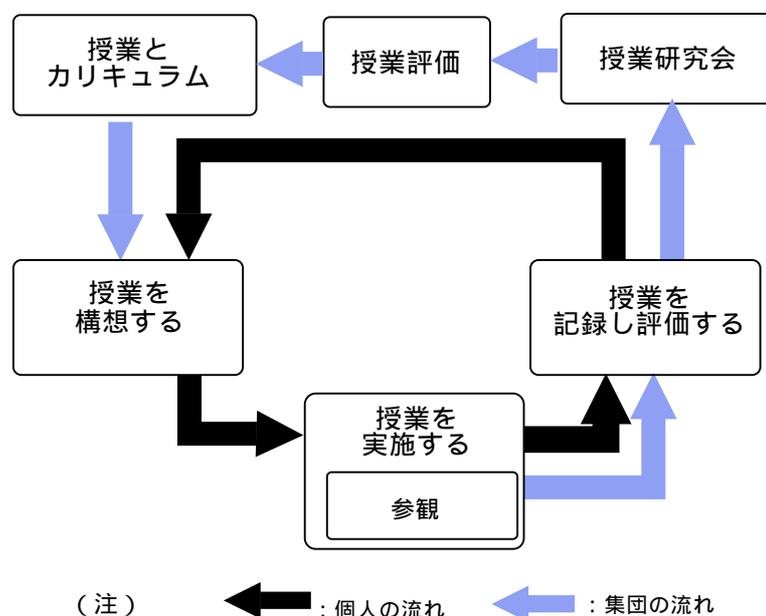


図4 授業構想とカリキュラム編成の流れ

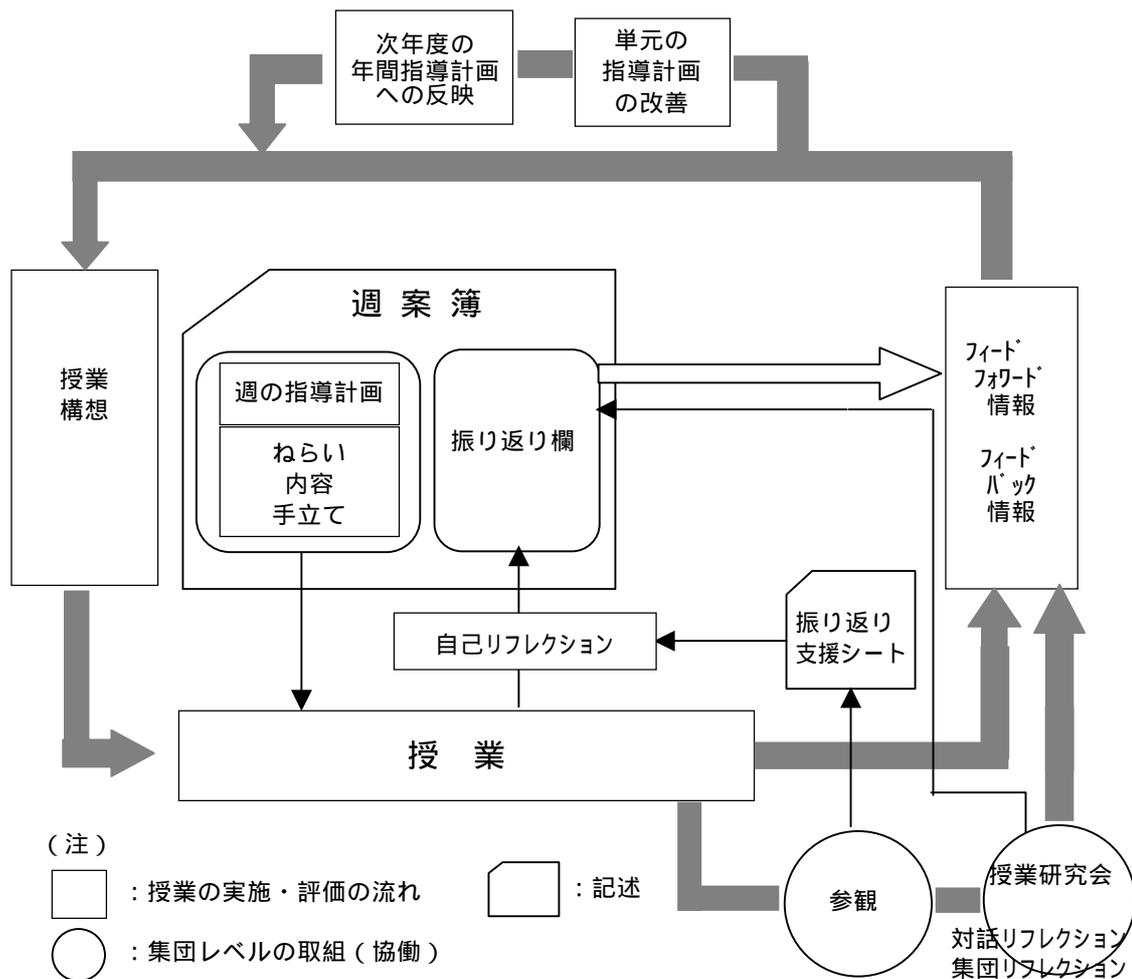


図5 週案簿活用モデルの概念図

このモデルは、授業者個人の流れと他の教師や集団による協働的な取組の2つ流れを設定したものである。授業者個人の流れとして、授業を構想し次週の計画を記入する、実施後に、自らの見取りをもとに授業を振り返る、振り返った結果を週案簿に記入するという流れを設定した。協働的な流れとして、授業を公開・参観し、参観者から得られた情報をもとに、自己の授業を振り返り、その結果を週案簿に記入していく、さらに授業研究会を設け、集団によって授業の検討を行い、その結果をもとに週案簿に振り返りの結果を記入するという流れを設定した。さらに、振り返り欄に記入された省察から得られるフィードフォワード情報（先読み情報）やフィードバック情報をもとに、次の授業や指導計画の改善へとつなげていく一連の流れを設定した。

また、個人の省察や集団による省察をより深めるために授業リフレクションを位置づけた。授業者個人が行う振り返りには、自己リフレクションと授業者を含め2～3名の教師で行う対話リフレクションを位置づけ、集団で行う振り返りには学年会や教科部会などの小集団で行う集団リフレクションを活用の流れに位置づけた。なお、本研究では、授業リフレクションについて、授業中に気になったことを記録し、子どもの学びの姿に基づき、授業を振り返ることとした。

(2) 週案簿の形式案

週案簿の形式については、図6に示すように設定した。省察と協働を支援するという視点に立ち、教師の振り返り活動を促すための欄を設けた。また、質的管理に必要な項目として、本時のねらいや手だてを記入する欄、さらに、実態調査の結果を踏まえ、多くの教師が記入している学習内容について記入する欄を設けた。

### (3) 振り返り支援シート

授業者が個人レベルで振り返りを行う際、他の教師の参観により、参観者から情報を提供するシートを設定し(図7) それによって授業者の振り返りを支援できるようにした。このシートを「振り返り支援シート」と呼ぶこととした。参観者が授業中の児童・生徒の発言や行動について気になったことを記録し、授業者に情報を提供することで、授業者の省察を支援するというものである。なお、本時のねらい、手立てについては、授業者があらかじめ記入しておくか、または、週案簿を公開し、そこから参観者が読みとって記入するものとした。

### (4) 授業リフレクションの手順

リフレクションとは、澤本・田中(1999)によると「ふりかえること、振り返って深く考えること(熟考)の意」であり、「授業を実施した教師が自分の授業実施中の思考や意識・感情などを内省し熟考して、洞察を加える」こととある<sup>(4)</sup>。本研究におけるリフレクションもこの立場をとるものとした。さらに、教師が個人で行うリフレクションを「自己リフレクション」、1～2名の対話者との対話を通して振り返りを行うリフレクションを「対話リフレクション」、小集団で行うリフレクションを「集団リ

		第 学期 第 週	
		日(月)	
予 定	ねらい		本時のねらい
			主な学習内容
第 1 時	内容手立て		手立て
			振り返り
第	ねらい		学年・組・教科名

図6 週案簿の形式案

月 日( )	年 組	授業者名	参観者名
第 校時	教科名		
本時のねらい			
群の手立て		群の手立て	
児童・生徒の学びの姿		児童・生徒の学びの姿	

図7 振り返り支援シート

月 日( )		年 組	教科	授業者	参観者
ねらい					
内容					
手立て					
抽出児童・生徒					
本時の流れ	付箋紙貼付欄			メモ	
<導入>					
<展開>					
<まとめ>					

注)付箋紙貼付欄には、生徒の発言やつぶやき、その他の動きで気になったことや感じたことを付箋紙に記入し、貼り付ける。その際、左上に小さく時刻を記入する。

図8 授業参観シート

フレクション」として週案簿活用モデルに位置づけた。授業を参観する際に使用する「授業参観シート」を図8に、集団リフレクションの具体的な手順を表3に示した。

集団リフレクションについては、参加者のリフレクションを促進する役目を担う「プロンプター（促進者）」を位置づけた。プロンプターは事前に授業者の授業観や参観者の授業観について充分理解しておく必要がある。そこで、図8に示した授業参観シートを事前に回収し理解を深めるように工夫した。また、必要に応じて、映像記録や音声記録を活用し、事前理解を十分行って臨むよう工夫した。なお、授業参観シートは、直接書き込むのではなく、付箋紙に気付いたことを記入し、シートに貼り付け、集団リフレクションの際には、その付箋紙を使って話し合いのポイントを焦点化した。本研究における集団リフレクションは、日常の学校教育の中で実施することを想定し、1時間前後とした。

表3 集団リフレクションの手順

段階	内容と留意点
1	< 授業実施前 > ・プロンプターは事前に本時の流れについて授業者に確認し、授業参観シートの「本時の流れ」を記入し、参観者に配布しておく。
2	< 授業実施 > ・参観者は授業参観シートに付箋紙で授業中に気になったことを書き記す。 ・ビデオによる映像記録やテープレコーダーによる音声記録を行う。
3	< 授業者の自己リフレクション > ・授業実施後に授業者による自己リフレクション。 ・結果を週案簿の振り返り欄に記入する。
4	< プロンプターの事前理解 > ・プロンプターは授業参観シートを回収し、参観者の授業観について事前に理解を深める。 ・回収した授業参観シートは参観者に返却する。
5	< プロンプターと授業者の対話リフレクション > ・プロンプターは事前理解を踏まえて授業者との対話リフレクションにより、授業者の振り返りを促進するとともに、授業者の授業観について理解を深める。
6	< 小集団による集団リフレクション > ・本時の流れを拡大して掲示し、授業参観中に記入した付箋紙をそこに貼り付ける。付箋紙が集まっている箇所を目安に、話し合いの視点を焦点化する。授業参観シートは事前に複写しておき、各参加者が自分の記述について手元で確認できるようにしておく。 ・授業を参観していない参加者がいる場合や、再度授業場面を見て、特定の場面を想起したいときには、ビデオによる記録などを映し出す。 ・プロンプターは参加者一人一人の授業観を踏まえ、参加者のリフレクションを促進するように進行する。

### 3 小学校における導入と検討

#### (1) 調査対象

群馬県内 A 小学校 教師 22 名

#### (2) 調査期間

10月18日(月)～11月19日(金)

#### (3) 方法

##### 事前説明

事前に、週案簿活用モデルの概要について説明するとともに、週案簿の記入方法について、以下の4点を依頼した。

- ・試行段階であるので、担当するすべての授業について記入するのではなく、教科は1教科に限定し、単元は特定の1単元に焦点化して記入する。

- ・単元等の指定は特にしないので、授業者に一任する。
- ・記入にあたり、授業実施の前週に、本時のねらい、学習内容、手だての欄について記入し、実施後に本時を振り返り、その結果を振り返り欄に記入する。
- ・振り返りの結果から、次時の手だてを変更する必要があるときはその部分を朱書きする。

#### 事後の質問紙調査

週案簿に設定した各項目への記入状況やそれらの項目と使用した教師の意識について質問項目を作成した。使用した後の意識については回答方法を4件法または3件法とし、一部に自由記述を含めた質問項目を作成して、調査紙とし、導入終了後に調査を実施した。

#### (4) 結果及び考察

週案簿に、ねらい、学習内容、手立ての記入欄を設けることは授業構想を明確にし、授業改善への意識を高めるのに有効であることが認められた。

質問紙調査の結果を表4に示す。表4は、調査によって得られた回答を「はい」と「いいえ」の2つに分けて集計した結果である。表4のAにおいては、「今まで本時のねらいを明確にして授業に取り組んだか」の質問に対して、「はい」「いいえ」がそれぞれ11と同数であったのに対し、「これから、本時のねらいを明確にして授業に取り組みたいか」に対しては、「はい」と答えた人数が22、「いいえ」が0という結果となった。このことは、ねらいを明確にして授業に臨む意識が高まったととらえた。また、表4のCでは「今まで本時における児童の学びの姿から次時につなげる手だてを考えて授業に取り組んだか」については、「はい」が5、「いいえ」が17であったのに対し、「これから本時における児童の学びの姿から次時につなげる手立てを考えて授業に取り組みたいか」については「はい」と回答した人数が22という結果になり、手立ての明確化についての意識が高まったととらえた。さらに、表4のBにおいては「ねらいや手立て等を記入することにより、イメージを持って授業に臨むことができたか」に対して「はい」と回答した人数が22であり、「いいえ」が0という結果になった。このことは、ねらいや手立てを明確にすることによって、授業の構想が明確になったことを示すものととらえた。

また、表4のDは手立てと児童の実態とかがわりについての質問であるが、「はい」と回答した人数が22人中18人という結果となり、児童の実態に基づいて手立てを考えた多くの教師が回答した。このことは、子どもの学びの姿に基づく授業構想についての気付きが表れたものととらえた。これらのことより、週案簿の「ねらい・内容・手立て」への記入が、授業構想を明確にして授業に臨むことに有効であるとともに、子どもの学びの姿に着目することを促すこ

表4 週案簿の記入状況と教師の意識 (回答数字は人数)

	質 問 項 目	はい	いいえ
A	今まで本時のねらいを明確にして授業に取り組んだか	11	11
	これから、本時のねらいを明確にして授業に取り組みたいか	22	0
B	ねらいや手だて等を記入することにより、イメージを持って授業に臨むことができたか	22	0
C	今まで本時における児童の学びの姿から次時につなげる手だてを考えて授業に取り組んだか	5	17
	これから本時における児童の学びの姿から次時につなげる手だてを考えて授業に取り組みたいか	22	0
D	手だてについては児童の実態をもとに具体的な手だてを考えて記入したか	18	4
E	振り返りを記入したことは、次時以降の指導の改善や個に応じた指導につなげることができたか	19	3
	振り返りの欄があることが、自らの授業の振り返りを促進させ、よりよい授業を行おうという意識につながったか	20	2
F	振り返りの記入を1年間継続すれば、次年度の年間指導計画改善や単元計画改善に役立つか	14	8

とが示唆された。

授業実施後の振り返りと振り返り欄への記述が、指導上の課題を明確にするとともに、次時につながる手立てを設定することや次年度の年間指導計画や単元の指導計画の改善につながることを示唆された。

表4のEにおいては「振り返りを記入したことは、次時以降の指導の改善や個に応じた指導につなげることができたか」について、「はい」と回答した人数が22人中19人という結果となった。また、「振り返りの欄があることが、自らの授業の振り返りを促進させ、よりよい授業を行おうという意識につながったか」については、「はい」と回答した人数が22人中20人という結果になった。これらの結果から、授業実施後に省察を行い、その結果を週案簿の振り返り欄に記入することが、指導の改善や個に応じた指導に有効であることや、教師の授業改善への意識を高めるのに有効であることが示唆された。また、表4のFからは、年間を通して継続的に取り組むことで、次年度の年間指導計画や単元の指導計画の改善につながることを示唆された。

週案簿の手立て欄において、授業実施後に次時の手立てに修正が加えられた例を表5に示した。前時の振り返り欄に「TとYにより多様な考えが示されたが $6 \div 2$ の考えを深められなかった」と記述されたのち、10月27日の手立て欄には、「図を用いて $60 \div 20 = 3$ をもう一度確認して本時の学習につなげる」と修正が加えられた。これは、前時において、2ケタのわり算についてのつまずきが、既習事項との混乱によるものであると洞察した授業者が、既習の計算と結びつけることではなく、図解により既習事項の確認をする必要があると判断したととらえた。また、10月29日の記述においては、児童Sのつまずきの原因を洞察し、次時にヒントカードを用いるように、手立てを修正していることがうかがえた。このように学級全体の傾向や個のつまずきに応じた指導の手立てが振り返り欄を通して修正されていることが示された。このことは、授業後の振り返りと振り返りの視点として子どもの学びの事実に着目した結果と推察した。これらのことにより、振り返りと振り返り欄への記入が、次の指導に生かす情報、すなわちフィードフォワード情報を授業者が取得し、次の授業の改善に向けての思考を促すことにつ

表5 振り返りによる手立ての修正例(第4学年 算数科 単元名「わり算」)

	第1時	第2時	第3時	第4時
	10月26日(火)	27日(水)	29日(金)	11月1日(月)
ねらい・内容・手立て	* ÷何十(余り無し)を理解し、その計算ができる ・ $60 \div 20$ の計算の仕方を考える 硬貨や10枚束等で10単位の考え方を導く 同内容でも発表させ、繰り返しにより理解を深める	* ÷何十(余り有り)を理解し、その計算ができる ・ $90 \div 20$ の計算の仕方を考える「積・商」を知る —助言により、既習の計算へと結びつける <b>図を用いて <math>60 \div 20 = 3</math> をもう一度確認して本時の学習につなげる</b> 余り1の児童には図や模擬貨幣でわり算の意味を考えさせる	* 2位数÷2位数の計算方法を考える ・ $87 \div 21$ の計算の仕方を考える —既習の計算練習から見通しを持てるよう助言する <b>実態に応じて難易度に差を付けた課題を用意し自力解決へむかわせる</b> 手のつかない児童にはアレイ図や実物で商を導く	* 2位数÷2位数の計算方法を考える ・ $87 \div 21$ の筆算の仕方を考える 1桁の筆算方法を確認し2桁の方法を考えさせる —包含除の問題により図示、操作をしやすくする <b>ヒントカードで前時の復習を与え、一緒に考え理解を深め本時につなげる</b>
振り返り	・NとTは商に0をつけた。 <b>0をとった数だけ付け足すという既習の方法から脱せ</b> ないためだろ。 ・TとYにより多様な考えが示されたが $6 \div 2$ の考えを深められなかった。	・Sは確認プリントからつまずき、いきなり模擬貨幣をつかわせた。 <b>つまずきの原因は10円=1個の概念形成にいたらないためだ。</b> ・Nは理解は微妙だが計算自体はできつつある。	・Nは課題プリントに順に取り組むことにより自力でできる部分が多かった。 ・Sはまだ理解不足 <b>一束=10枚で説明してかえって混乱させてしまった。</b>	

注)「ねらい・内容・手立て」の欄において、\*印はねらい、・は学習内容、 は手だてを示す。ゴシック部分は修正された手立てとその修正に関連した振り返りを示す。

ながるとともに、教師が、指導上の課題を明確にし、次時に生かす手立てを設定することにつながることを示唆された。

週案簿の形式はできるだけ簡便であり、細分化されていないものが望ましいという傾向が見られた。

週案簿の形式案は、全教科について細かく記入するものであったが、記入はできる限り簡便で継続できるものが望ましいとの意見があり、多くの教科について細かく記入することは困難であることが示唆された。1教科分だけ枠を大きくし、文章を記入しやすくすることや、それらを時系列につなげることなどの工夫が必要であることが示唆された。

#### 4 中学校における導入と検討

##### (1) 調査対象

群馬県内A中学校 教師 12名 及び 群馬県内B中学校 教師 1名

##### (2) 導入期間

上記の中学校において、平成16年10月25日～11月19日の4週にわたり導入した。実際の記述は、11月1日からの3週分である。

##### (3) 方法

###### 導入方法

##### (ア) 導入した週案簿の形式

図6に示した週案簿の形式を基本とし、本時のねらいと学習内容の欄は一つにまとめ、区切りをなくしたものを使用した。

##### (イ) 事前説明

週案簿活用モデルの概要や、記入方法について示した資料を使い、導入期間の1週間前に以下の4点について依頼した。

- ・ 試行段階であるので、担当するすべての授業について記入するのではなく、教科や学年を限定した上で記入する。
- ・ 該当する週の1週間前に対象となる授業について、本時のねらい、学習内容、手立てを記入し、授業終了後に振り返り欄を記入する。
- ・ 振り返りの結果から、次時の手だてに変更が生じた場合は、朱書きで書き込む。
- ・ 振り返りを行う際には、生徒の学びの姿に着目し、学びの事実から振り返りを行う。

##### (ウ) 授業の公開・参観

週案簿の活用と授業の公開・参観を関連づけ、さらには授業改善に結びつけることをねらいとし、週案簿を使って授業を公開・参観する取組を実施した。3週にわたり、教師一人につき、2時間程度を参観し、述べ25時間の授業を参観した。参観にあたり、子どもの学びの事実を中心に授業を記録した。授業者は、その記録をもとに授業の振り返りを行い、週案簿に記入した。

##### (エ) 授業リフレクション（対話リフレクション・集団リフレクション）

平成16年12月6日にA中学校において、リフレクションの対象となる授業を実施した。授業終了後に授業者と対話リフレクションを行ったのち、翌日の12月7日に授業者を含めた5名の教師による授業研究会（集団リフレクション）を実施した。授業研究会の発話記録と実施後の聞き取り調査により、参加者の気付きや研究会の形態について検討した。

###### 検討方法

##### (ア) 調査1

導入した週案簿について、どの項目を教師が重要と感じているかについて設問1、教師の授業観・学習観の変容について設問2を設定し、質問紙を作成した。設問1においては、週案簿に設定した4つの項目（ねらい、内容、手立て、振り返り）について、もっとも重要なものが

ら1、2、3、4と順序をつけるように回答を求めた。各教師が4項目の中で何を重視しているかを調べることを通して、振り返り欄の相対的な位置づけを調査した。

また、本研究においては、児童・生徒の学びの事実をとらえることにより児童・生徒理解を深め、そのことにより教師の授業観や学習観の変容を図ることを中心的な課題として取り上げている。そこで、設問2については、授業の設計及び実施の過程で教師が重要と感じていることについて調べることを目的とし、項目を設定した。既往の研究で、佐藤ら(1991)<sup>(5)</sup>が用いた5項目(学問・文化の理解と関心、教材研究と授業プランの作成、発問の技術、子どもの発言・意見の理解と対応、授業の反省と批評)と本研究の中心課題である教師の授業観や学習観に関する項目を加え、6項目を設定した。佐藤らが設定した5項目は授業実施の過程(教材の理解-計画-実施-反省)に沿った観点であり、教師の熟達化を扱った研究の中で設定した項目である。これらに、教師の授業観や学習観についての項目を加え、6項目とした。設問1と同様、もっとも重要なものから1、2、3、……と順序をつけるように説明するとともに、導入前と導入後を比較し、自己評価するという形式で回答を求めた。調査対象をA中学校の教師14名とし、導入2週目の終わりに実施した。

#### (1) 調査2

週案簿の導入が終了したところで、調査1と同様の項目について再度調査を実施した。調査1が同順位を許可しない順位づけの評定であるのに対し、各項目がそれぞれの教師にとって、どの程度重視されているかを5段階で評定させる質問紙を作成した。調査1と同様に、導入前と導入後を比較し、自己評価するという形式で回答を求めた。

#### (ウ) 週案簿の記述内容の分析

週案簿の振り返り欄に記述された内容を分類し、記述内容の質的変容を週を追って検討した。

#### (I) 発話記録の分析

集団リフレクションの発話記録、集団リフレクションの参加者への聞き取り調査を発話記録として文字化し、特徴的な発話を抽出した。

#### (4) 結果及び考察

週案簿に振り返りの欄を設け、毎時の振り返りを行うことにより、児童・生徒理解への認識が高まったことが認められた。

表6に調査1の設問1による結果を示す。

表6が示すように、ねらい、内容、手立て、振り返りの各項目の評定平均は、1.33、2.58、2.58、3.50となり、振り返りは、もっとも低い順位となった。授業の計画立案に重点が置かれていることの表れと考える。そのような中でも、教師5、教師7、教師9、教師10、教師11の5名の教師は振り返りについて、2もしくは3と評定しており、授業後の振り返りについて関心が高まったと考える。

さらに、調査1設問2において、授業観の変容について自己評価を求めた結果、表7が示すように、4名の教師(教師1、教師2、教師5、教師10)から、週案簿の導入前と導入後で異なる回答を得た。

教師1については、評定2・3として、発問技術・子どもの発言理解と回答していたの

表6 週案簿の項目についての重要度評定

	ねらい	内容	手立て	振り返り
教師1	1	2	3	4
教師2	2	1	3	4
教師3	2	1	3	4
教師4	1	2	3	4
教師5	1	4	2	3
教師6	3	1	2	4
教師7	1	4	2	3
教師8	1	3	2	4
教師9	1	3	4	2
教師10	1	4	2	3
教師11	1	4	2	3
教師12	1	2	3	4
平均値	1.33	2.58	2.58	3.50

注)最も重要と考えるものから同順位を許可せずに評定している。

に対し、導入後は子どもの発言理解が発問技術を上回る回答となった。さらに、個人内で見ると、子どもの発言理解に評定2を付けており、子どもの学びの姿を重視する傾向が強くなったことがうかがえた。このことは、子どもの学びの事実に基づく授業の記録や振り返りが影響し、児童・生徒理解への意識が高まった結果と推察された。

教師2については、子どもの発言理解に評定5と回答していたのに対し、導入後は、子どもの発言理解が評定3となり、学びの事実に基づく授業の記録や振り返りについての重要度が高くなった。授業観は、個人内では相対的に重要度が下がった。

教師10については、導入前に教材研究、発問技術の順で重視していたのに対し、教材研究の次に子どもの発言理解が位置し、ついで授業の反省と回答した。さらに、同教師は設問1において、振り返り欄の記入に評定3を付けており、このことは、導入前までは、授業を構想する際に、教材研究や発問技術など、指導技術的な視点を重視していたのに対し、授業後の振り返りを行うことにより、児童・生徒の発言や意見への理解と対応に関心が高まったことを示すと考えた。

教師5については、授業の反省に評定3が付けられ、授業の反省が授業を構想する際に重要であることに気付いたと推察した。

このような結果から、週案簿に振り返り欄を設け、毎時の振り返りを行うことが、子どもの意見や発言への理解と対応を重視し子どもの学びの事実に基づいた授業を構想しようとする授業観への変容を促すことが示唆された。

しかし、対象となった教師のすべてにこのような傾向が確認されたわけではない。このことは、振り返り欄の記述内容や記述の仕方については、啓発資料として示したが、あくまで教師個人の意思を尊重し、教師自身が納得した上で週案簿の記述をするとの立場をとったためである。週案簿の活用をより効果的に授業改善に結びつけるためには、導入段階でいかにして教師の同意を得るか、そのための資料づくりや、気付きを促す取組が課題である。

調査1の結果については、授業観について重視している教師は少ない傾向が認められた。週案簿は数日後の授業計画を計画・立案するという性格を有するものであるから、ねらいや内容

表7 授業の設計・実施にかかわる項目の重要度評定

評定		1	2	3	4	5	6
教師1	前	教材研究	発問技術	子どもの発言理解	授業の反省	授業観	学問・文化の理解
	後		子どもの発言理解	発問技術			
教師2	前	教材研究	発問技術	授業観	授業の反省	子どもの発言理解	学問文化の理解
	後			子どもの発言理解		授業観	
教師5	前	教材研究	子どもの発言理解	授業観	授業の反省	発問技術	学問・文化の理解
	後			授業の反省	授業観		
教師10	前	教材研究	発問技術	子どもの発言理解	授業の反省	授業観	学問・文化の理解
	後		子どもの発言理解	授業の反省	発問技術		

注) 評定は、重要と考える項目から1、2、3、……と評定している。

上記4名の教師以外は、導入前と導入後で回答に変化はない。

「」は上の項目と同じであることを示す。

が重視される傾向が強くなったためととらえた。自らの授業観を自覚し、また他の教師の授業観に触れるためには、週案簿を通して日常的な振り返りを行うだけでなく、複数の教師による協働的な振り返りを行い、互いの授業観を高め合う必要があることが示唆された。すなわち、日常的な振り返りとともに、授業研究会などの集団的な振り返りを組み合わせて行う必要があると考えた。

振り返り欄の記入によって、子どもの学びの事実への気付きが促され、適切なフィードバック情報が得られるなど、記述の内容に授業改善につながる変容が認められた。

週案簿の振り返り欄に記述された内容の特徴を分析するため、本研究においては、分析カテゴリーを図9のように設定した上で、分類し考察した。このカテゴリーのうち、ここでいう「子どもの学びの事実」とは、授業中の子どもの発言や行動などに関する記述である。また、「事実の記述」とは振り返りの記述内容が事実の記述のみで終わっているものを指す。「事実と理由の推論」とは、事実に対してその理由にまで記述が及んでいるものを指す。「改善策・方向性」とは次時での手立てや改善の方向性にまで記述が及んでいるものを指す。「適時指導」とは、ある事実とそれに対して授業中に対応した内容にまで記述が及んでいるものを指す。振り返り欄への記述数は合計で180コマ、そのうち子どもの学びの事実についての記述が109コマ(60.1%)、教師自らの指導技術に関する記述は71コマ(39.9%)であった。

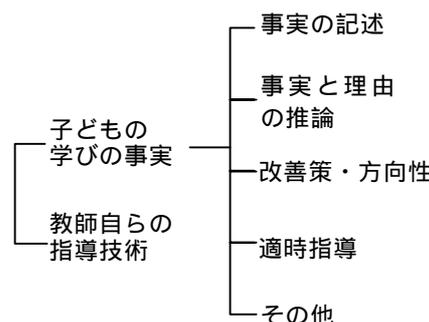


図9 振り返り記述内容の分析カテゴリー

表8は109コマの内訳を導入期間の第1週から第3週まで時系列で示したものである。表8が示すように学びの事実の記述については、各週の合計が26、38、45と推移し、導

表8 振り返り欄記述内容の分類

	事実の記述	事実と理由の推論	改善策・方向性	適時指導	その他	合計
第1週	14	7	1	4	0	26
第2週	16	6	11	2	3	38
第3週	25	8	11	0	1	45
合計	55	21	23	6	4	109

注) 数値は個数

入が進むにつれて記述数が増加する傾向を示した。すなわち、振り返りの記入が定着し、調査対象者となった教師に受容されたことを示すとともに、子どもの学びの姿に着目した授業の振り返りについて関心が高まった結果と推測した。また、次の授業についての手立てが表現されていたり、今後の方向性が示されている「改善策・方向性」について、1週目が1であるのに対し2週目以降、11と増加していることから、振り返り欄への記入が、授業改善への意識を高めることが示唆された。

導入した週案簿についての意見や感想を自由記述によって調査したところ、調査対象者14名のうち7名の回答を得た。そのうち、振り返り欄について記述があった3名の記述を表9に示した。

番号1の記述では、授業の構想段階において、ねらいや手立ての設定と合わせて、振り返りを記述することが教材研究や授業構想を行う上で有意義であることが書かれていた。

番号2の記述では、振り返り欄への記述が、授業を具体的に考えることにつながったり、授業中の評価の視点を意識することにつながるとの考えが表出された。

番号3の記述では、振り返りの記入によって、自己の授業観への気付きが表出されており、合わせて、フィードバック情報やフィードバック情報を得ることに役だったことが書かれ

ていた。

このように、振り返りの記入は、次の授業に生きるフィードフォワード情報やフィードバック情報を生み出すことに有効であることが示唆された。また、継続して記入することを通して自己の授業観への気付きを生み出すことが示唆された。

表9 週案簿の記入についての自由記述

番号	自由記述
1	今まで、週案簿は週あるいは月単位の「指導の予定」(予定進度)を記入していたが、今回、「ねらい」や「手立て」、「振り返りの欄」を設定することにより、より深く教材研究や授業準備を行うことができた。特に「振り返りの欄」については、今後、さらに活用していきたい。
2	振り返る機会が設定されたことで、今まで頭の中だけで過ごしていたことが、文章として表すことで、より具体化され、次時の授業等で意識してみることができたと思います。
3	週案簿をつけていても、今までは、振り返りや反省を(ああすればよかったと思っても)書くことがなかったのですが、今回意識してメモすることで、日々の記録や自分の授業の改善点や自分の指導の傾向のようなものがわかってきて、次にいかしていこうと思ったり、直していこうと思ったりするきっかけとなりました。

週案簿活用モデルの導入によって、教師のもつ授業観や学習観への気付きを促し、子どもの発言についての理解、授業後の反省についての取組を促進させる傾向が認められた。

調査2で得られた回答のうち、授業の設計・実施にかかわる項目について導入前の考えと導入後の考えで比較した結果を表10に示した。この表が示すように、導入前と導入後の比較において、「授業の反省」が+0.8と6項目中もっとも大きく、ついで「授業観・学習観」と「子どもの発言理解」が+0.6、「学問・文化の理解」が+0.4という結果

表10 授業の設計・実施にかかわる項目の重要度評定の変化

	学問・文化の理解	授業観・学習観	教材研究	発問技術	子どもの発言理解	授業の反省
導入前の考え	3.1	3.7	4.7	4.2	3.6	3.7
導入後の考え	3.5	4.3	4.8	4.4	4.2	4.5
差	+0.4	+0.6	+0.1	+0.2	+0.6	+0.8

注) もっとも重要と思うものを5として、5段階で評定をつける。  
 数値は調査対象者全体の平均値を示す。  
 差は「導入後」-「導入前」

となった。このことより、振り返り欄を設けたことが、授業後の反省や自己の授業観、子ども観への気付きを促したと推測した。

集団リフレクションにより、自己の授業観への気付きや深まりを促すことが示唆された。

集団リフレクションの発話記録から、自己の授業観への気付きや他の教師との比較または関連づけを行っている発話の事例を表11に示した。発話番号2では、教師1が授業者の授業観に触れ、「テンポ」や「リズム」以外に、個々の生徒を大切にしたいという考えが表出されていると解釈した。また、発話番号4、6の記録では、授業者の授業観として、「テンポ」や「リズム」を大切にするという考えが表出されていると解釈した。発話番号8では、教師2が授業者の授業観に触れ、それとの比較から自己の授業観への気付きを発話し、さらに「テンポの良さってというのは斬新です」と認めた上で、自己の授業観を表出していると解釈した。また、発話番号10においては、教師1が、授業者の授業スタイルから、常時指導を自らの指導に取り入れていくことを示唆する発話が見られた。発話番号11においては、授業者が、教師1や他の参加者の発言に触れ、自己の授業スタイルに対する省察を行っていることがうかがえた。このように、プロンプター(促進者)を伴う集団的なリフレクション(集団リフレクション)は、教師が相互に自己の授業スタイルを表出させ、自らの授業観の自覚や深化を促すことが示唆された。

表 11 集団リフレクションにおける自己の授業観への気付きとその変容にかかわる発話事例

発話番号	発言者・発話記録
1	プロンプター： 3年生だと微妙にかわるということは、3年生独特の特性みたいなもの、発達段階があるとお思いなのでしょうか。
2	教師1： <b>私が引っ張っていく授業ではついてこない。どちらかという子どもたちに投げかけて考えさせて子どもたちが自分たちで気が付きながらやっていく形でないと思欲も低いんかと思ながら見ていました。</b> (中略)
3	プロンプター： そのためにテンポを大事にするってことなんですね。
4	授業者： <b>テンポを遅くするとだれて(しまって)たとえばノート出しません、読みませんっていうのが正直なところ出てくる。だからテンポを早くしながらも、おいてかないぞっていうのは、全員をつれていくぞっていうのは持っている。</b> (中略)
5	プロンプター： 先生のおっしゃるリズムっていうのは、一定の早いリズムですか、それとも、ときに遅くときに早くっていうリズムでしょうか。
6	授業者： <b>子どもにとって、気持ちいいリズム。例えばほんとに早すぎて、もうだめだというのだと、それはリズムがない。たしかに早いんだけど、追い立てられるんだけど、ちゃんとできて、ついていける。</b> (中略)
7	プロンプター： 先生(教師1)、テンポとかリズムとかを大事にして、そして全体指導の中でも個々に目標をコントロールしながらっていうのが先生(授業者)の授業スタイルというのが浮かび上がってきました。先生がさっきおっしゃった3年生の授業ではというのがありますよね。これは先生が発達段階にかかわって、気になることがあるように感じますけど。
8	教師1： <b>発達段階というか、あとは、私、やっぱり指導する側の、指導者の思いとかあると思うのですよね。どちらかという対局的かもしれないんですけど、私は、ていねいに書かせるとか、じっくり時間を確保するので、その中でやるという方にいきがちなので、<u>逆に昨日のテンポの良さっていうのは斬新ですし、</u></b> (中略) 教師が主に引っ張っていつてるんだけど、あの生徒たちがなんとなくねらいを自分たちから、出したようなそういう感じの授業にしていきたい。 (中略)
9	プロンプター： 最後に、お一人ずつ、この会での気付きや感想をお願いします。 (中略)
10	教師1： ほんとに漢字スキルでの学習習慣っていうか、そういうのもきちんと身に付いてまして、引き継いだ上で指導しやすかったですし、(中略) <b>習慣が身に付いていて、すぐ授業に入っていける形が見えたので、やっぱり日頃の指導の仕方、言語環境を含めて、辞書を常に用意していて辞書をこまめにひかせるとか、そういうところも気をつけながら日々、繰り返しの指導が必要と感じました。</b>
11	授業者： この会の中で、一人一人のっていうことが出てたんですけど、(習熟の遅い)子どもたちができるようになる授業をしたいなあと思うんです。当然、そのできる子どもどんどん伸ばしてやるということも同時にやらないと。自分の力をさらに伸ばすから楽しいのかなって思うんです。昨日は自分なりに全体を確かに見えたなって思うんですけど、 <b>作文であるとか難しい内容理解になったときに、やっぱり(習熟の遅い)子を置き去りにするようなことがあるので、もう少し勉強して、難しい部分でも(習熟の遅い)子どもたちが楽しいなって思えるような授業がしたいと思うんです。</b>

## 5 まとめ

週案簿活用モデルを県内の小学校、中学校各1校に導入した結果、次のような結論を得た。

### 1)見通し1について

小学校における導入によって週案簿に、ねらい、学習内容、手立てを記入することは、指導上の課題を把握し、次時につながる手立てを設定するなど、授業の構想を明確にし、授業改善への意識を高めることに有効であることが認められた。

### 2)見通し2について

小・中学校における導入では、「振り返り」の記入をすることが、子どもの学びの事実への気付きを促し、適切なフィードフォワード情報をもって授業に臨むなど、児童・生徒理解や授業改善についての意識を高める傾向が認められた。

### 3)見通し3について

中学校における導入では、授業リフレクションを含んだ週案簿活用モデルによって、教師間の協働的な授業研究が形成され、多面的な生徒理解が促されるとともに、個々の教師の授業観への気付きや深まりが促されることが認められた。

## IV 活用ハンドブック「週案簿から始める授業改善支援資料集」の作成

### 1 はじめに

週案簿活用モデルの試行から得られた知見をもとに、本モデルの導入を支援するための資料集「週案簿から始める授業改善支援資料集」(以降、活用ハンドブック)を作成した。県内の小学校、中学校で導入し検討した結果、週案簿を授業改善に生かすためには、週案簿の形式だけでなく、その活用の在り方に視点を当てることが重要であると示唆された。しかしながら、週案簿を授業構想の流れの中でとらえること、省察という考え方、授業リフレクションなどについて実践した例は見あたらない。そこで、本モデルの検討結果を踏まえ、学校現場において、省察概念や授業リフレクション及び週案簿活用モデルとしてとらえた週案簿の導入を支援するための資料集を作成することにした。活用ハンドブックの実際は巻末に示した。

### 2 内容

#### (1) 週案簿活用モデルの概要説明

週案簿活用モデルの概要について説明するとともに、リフレクションやフィードフォワード情報、フィードバック情報など、使用されている用語や概念について解説した。

#### (2) 活用の流れ

週案簿活用モデルは、個人を中心として活用する流れと、授業を公開・参観し、そこから生み出される協働的な流れという、2つの流れがある。個人の流れについては、一人で振り返りを行う場合と、振り返り支援シートなどを活用し、参観者から得られた情報をもとに振り返る場合の2つを設定した。また、協働的な流れとして、対話リフレクションや集団リフレクションを取り入れた2つの展開例を示した。それぞれ、「自己リフレクションコース1」、「自己リフレクションコース2」、「対話リフレクションコース」、「集団リフレクションコース」と呼ぶこととした。

#### (3) 本モデルにおける週案簿の形式案と記入例

週案簿活用モデルで推奨する週案簿の形式を示すとともに、具体的な記入例を示した。特に、振り返り欄への記述が実際にどんな内容であるか分かるように具体的に記述した。

#### (4) 本モデルにおける授業リフレクション

本モデルにおける授業リフレクションのとらえや、リフレクションの三形態(自己リフレクション、対話リフレクション、集団リフレクション)についての説明を記述した。

#### (5) 活用パターンと展開例

個人の振り返りについては、自己リフレクションを取り入れた2つの展開例を示した。また、授業の公開・参観を伴う協働的な取組については、対話リフレクションと集団リフレクションを取り入れた2つの展開例を示した。各々について、自己リフレクションや対話リフレクション、集団リフレクションの具体的な進め方について示すとともに、補助的に活用するワークシートなどを掲載した。

## V 総括

実態調査を踏まえた週案簿の形式案を作成するとともに、活用の在り方までを含めた週案簿活用モデルを作成し検討することができた。省察の視点として子どもの学びの事実に着目することや日常的な振り返りを行うことが自己の授業観を自覚し深めることにつながると示唆された。また、授業リフレクションという授業研究の形態が、学校の協働や授業の改善を促進する可能性についても示唆された。

一方で、本モデルを活用した場合の校内組織や具体的な手順などについては、各学校の運用に委ねている。この点については、今後、実践事例等を蓄積し、深めていく必要がある。また、対話リフレクションや集団リフレクションにおいて、プロンプターの存在が重要である。本モデルにおいては、授業参観シートを使い、プロンプターの事前の理解を支援しているが、プロンプターに必要な資質や能力を高めるには充分とは言えない。単なる進行役ではなく、リフレクションの意味を理解し、それぞれの教師がもつ授業観を高める役割を担うプロンプターをどのように支援していくかが今後の課題である。

### <引用文献>

- (1)秋田喜代美 著 「教師が発達する筋道 文化に埋め込まれた発達の物語」 藤岡完治・澤本和子 編著 『授業で成長する教師〔シリーズ 新しい授業を創る 第5巻〕』 ぎょうせい(1999)、p.30
- (2)佐古秀一・久我直人・大河内裕幸・山口哲司 著 「省察と協働を支援する学校改善プログラムの開発的研究」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)第14巻』 鳴門教育大学(1999)、p.55
- (3)住岡敏弘 著 「保護者・地域との協働を推進する情報発信」 木岡一明 編 『学校の組織設計と協働態勢づくり(チェックポイント・学校評価2)』 教育開発研究所(2003)、p.87
- (4)澤本和子・田中美也子 著 「第11章 教師の成長とネットワーク」 藤岡完治・澤本和子 編著 『授業で成長する教師〔シリーズ・新しい授業を創る第5巻〕』 ぎょうせい(1999)、pp.129
- (5)佐藤学、秋田喜代美、岩川直樹、吉村俊之 著 「教師の実践思考様式に関する研究(2)」『東京大学教育学部紀要 第30巻』 東京大学教育学部(1990)、p.183